

# ふるさと見て歩き

第74回

## 松之草村小八兵衛の墓

緒川地域の松之草地区には、時代劇「水戸黄門」でおなじみの「風車の弥七」のモデルになったといわれる松之草村小八兵衛の墓があります。しかし、時代劇「水戸黄門」に登場する「風車の弥七」は架空の人物として設定されているため、松之草村小八兵衛がそのモデルとは残念なが



▲小八兵衛の墓全景

ですが、松之草村の小八兵衛は実在の人物だったようです。江戸時代後半の寛政二年（一七九〇）に水戸藩の学者石川久徴によってまとめ

られた『桃蹊雑話』に、二代藩主光圀に登用された人物として登場します。『桃蹊雑話』は、水戸藩初代藩主頼房から六代藩主治保までのエピソードを、考証（歴史）好きだった久徴が調べたり聞き取ったりして備忘としてまとめたものです。とはいえ、光圀は元禄十三年（一七〇〇）に七十二歳で亡くなります。『桃蹊雑話』はその九十年後に刊行されたもので、脚色されて伝えられている可能性もありますが、考証学者の久徴が書き留めている点には注意を払わなければなりません。『桃蹊雑話』の小八兵衛についての記述を要約すると以下のようになります。

義公（光圀の諡号）の時代、松之草村に小八兵衛と名乗る者がいて、一晚に三十里を駆け巡る、忍びの術を持つ盗賊の頭だった。やがて捕縛されたが義公の恩情で禄を賜り、仕えることとなった。小八兵衛は、こののち領内に盗賊を立ち入らせないと誓いを立てた。また問者（スパイ）として諸国の情報をもたらし、生涯義公に尽した。小八兵衛は忍者であり、盗賊でもあったというのです。捕まっても処罰されずにかえって登用されたといういささか信じがたい内容です。

◆光圀の家臣にまつわる話

しかし、これに類する光圀の家臣や召使についての逸話や伝承は複数

残っています。

平戸藩主松浦清（静山）の著した『甲子夜話』には、光圀の召使で長年姿を見せずに仕え続けた者が、あるとき不手際のためにとがを受け、光圀が憐れみながらも手討ちにし、その後、その髑髏で作った盃を終生愛用した、という内容のエピソードが記されています。また、光圀の側近として登用され、老中だった藤井文大夫が光圀が江戸藩邸で手討ちにした話は有名です。

更に、前述の『桃蹊雑話』には、光圀の時代、水戸藩へ仕官してきた人物に、召し抱えることができない旨を伝え、金を与えて帰そうとしたところ、その人物はその場で腹を切って自害したという話や、同じ頃、殺人の罪を他人にかぶせていたことが三十年以上後に発覚した者に対して生胴（生きたまま胴を切る）の刑に処した、という記述も見られます。光圀の生きた十七世紀後半は、まだ戦国の荒々しい気風が残されていたようです。大名が、身辺警護や情報収集のために忍者や問者などを手元に置くことは近世初期までは一般的だったと考えられます。

つまり「弥七」のモデルになった人物は小八兵衛だけでなく、もともとたくさん存在した可能性があるのです。伝承が正しければ、小八兵衛のものとされる墓石には「帰真単山宗心」という戒名と元禄十一年五月二日に

没した旨が刻まれています。また、その隣に建つ、妻お新のものとされる墓には「帰真梅柏池春禪定尼靈位」と刻まれます。お新は元禄四年正月十三日に没したようです。ただし墓石に俗名の記述はありません。根拠の程は明らかではありませんが、道を挟んだ反対側の畑は、小八兵衛とお新の住居があった地とされています。水戸黄門の諸国漫遊も弥七の存在もフィクションですが、光圀が歴代藩主としては最も多くの領内巡視を行い、小八兵衛のような庶民とも交わった藩主だったのは間違いないようです。



▲小八兵衛と伝わる墓

※貴人や徳の高い人に死後おくる名

歴史民俗資料館大宮館

☎ 52-11450